平成29年5月1日（毎月1日発行）　赤十字NEWS　第924号（昭和24年9月30日 第三種郵便物認可）

Japanese Red Cross Society NEWS

赤十字NEWS

http://www.jrc.or.jp

May 2017
NO.924

5

日本赤十字社創立140周年特別号
The 140th Anniversary Special Edition

赤十字

人類は、右の手で
戦争
左の手で
をして人を殺し、
を作って人を助ける。
あなたはその両手で
何をしますか？

「愛・地球博　国際赤十字・赤新月パビリオン」壁面メッセージより

CONTENTS

FEATURE__2
日赤創立140周年企画
理念とともに歩む赤十字Ⅰ
日本赤十字社
140年のこれまで
理念とともに歩む赤十字Ⅱ
あの日々を忘れない
理念とともに歩む赤十字Ⅲ
国際赤十字
154年の足跡

TRIVIA__8
知っていましたか？ こんな雑学

SPECIAL TOPICS__10
［赤十字運動月間］

AREA NEWS__12
静岡／滋賀／大阪／福井／広島／
香川／徳島／熊本
Column
［昭憲皇太后基金］
［健康豆知識］「がん」って何？

WORLD NEWS__14
ネパール地震から２年　復興支援事業
new!
Column
［とっさのとき、どうする？］
骨折と捻挫

NOTICE from JRCS__16

赤十字新聞　編集・発行／日本赤十字社 広報室
〒105-8521 東京都港区芝大門 1-1-3
TEL：03-3438-1311
一部 20 円
赤十字新聞の購読料は会費に含まれています。

人間を救うのは、人間だ。

日本赤十字社
Japanese Red Cross Society

平成29年5月1日（毎月1日発行） 第924号（昭和24年9月30日 第三種郵便物認可）

FEATURE

理念とともに歩む赤十字 Ⅰ

History of the Japanese Red Cross Society

日本赤十字社140年のこれまで

「戦時救護」から始まった日本赤十字社の活動は、第二次世界大戦の終戦を機に「戦時」から離れ、「災害救護」、そして「人道支援」を中心としたさまざまな事業へと転換してまいりました。「血液供給」も、「人の育成」も、「ボランティアの活性」も、日赤の展開する事業はすべて、苦しんでいる人を救うという理念に根ざして誕生し、未来に向けて日々研鑽（けんさん）を続けています。

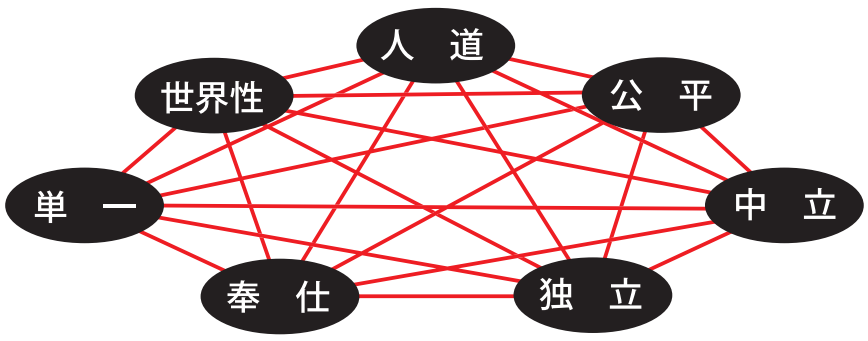
日赤140周年を記念するこの特集では、日赤の事業の足跡を辿りながら「理念」と「実践」の詰まった歴史を振り返ります。

日本赤十字社の使命

わたしたちは、
苦しんでいる人を救いたいという思いを結集し、
いかなる状況下でも、
人間のいのちと健康、尊厳を守ります。

わたしたちの基本原則

わたしたちは、世界中の赤十字が共有する７つの基本原則にしたがって行動します。



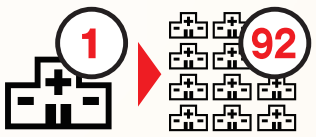
日本赤十字の創設者の一人
佐野常民
（1822-1902）

若い頃の佐野常民

1877 ・救護団体「博愛社」設立

佐野常民（つねたみ）は幕末に佐賀藩士として生まれた。1867年にパリ万国博覧会に参加し、国際赤十字の活動を見聞。帰国後は明治政府のもとで日本の近代化に寄与し、元老院議官となる。西南戦争（明治政府軍 × 薩摩軍）の惨状を知って、今こそ博愛の精神で赤十字活動を始める時だと考え、同じ元老院議官である大給恒（おぎゅうゆずる）（1839-1910）と連名で「博愛社設立願い書」を政府に提出。元老院議長などの公職に就きながら、日本赤十字社社長に就任し、生涯を日赤の活動に捧げた。

1886 ・博愛社病院設立
（現 日本赤十字社医療センター）



現在、全国の赤十字病院は 92 施設に

1887 ・日本赤十字社に改称し、国際赤十字に加盟
・篤志看護婦人会創設

篤志看護婦人会による包帯作り

神戸港で帰国の船に乗るポーランド孤児

1888 ・磐梯山噴火で救護班派遣

世界初、平時の自然災害救護となった磐梯山噴火での救護

1890 ・救護看護婦の養成を開始
・遭難したトルコの軍艦エルトゥールル号救護

1891 ・濃尾地震で日赤養成の看護婦を初めて派遣

柄の筒袖和服に白エプロンが最初の看護衣
（日本赤十字看護大学所蔵写真）

1894～95 ・日清戦争で救護活動

1896 ・三陸地震による宮城県以北の大津波で救護

三陸津波では２万 7000 人強が亡くなった

1904～05 ・日露戦争で救護活動
（病院船も派遣）

1914～22 ・第一次世界大戦、およびシベリア出兵での救護活動

ロシア・ウラジオストクでの救護員と病院列車（1918 年）

1920～22 ・ロシア革命後のポーランド孤児を救済

2016
・熊本地震で救護（207班1600人派遣）

熊本赤十字病院に緊急搬送された患者を心肺蘇生

海外からの救援金により被災者約13万世帯に生活家電6点セット（洗濯機・冷蔵庫・テレビ・炊飯器・電子レンジ・電気ポット）を配布

2011
・東日本大震災で救護
（896班7000人超派遣）

2013
・赤十字原子力災害
情報センター設置

2004
・新潟県中越地震で救護
（こころのケア活動を本格展開）

2001
・インド大地震で初のERU（緊急対応ユニット）を導入

海外でも大規模災害は頻発している。スマトラ島沖地震・津波（2004）、パキスタン北部地震（05）、ジャワ島中部地震、ケニア洪水（06）、バングラデシュ サイクロン（07）、中国四川省大地震（08）に日赤から救護を派遣した。

1996
・ペルー日本大使公邸人質事件で医療班派遣
・介護福祉士の養成開始

避難所では医療活動やボランティアによるマッサージなども行われた

1995
・阪神・淡路大震災で救護（延べ6000人の救護要員派遣）

阪神・淡路大震災

1991
・雲仙普賢岳噴火で避難所への巡回診療や救援物資を配布

1985
・群馬県御巣鷹山 日航機墜落事故に救護班を派遣（154班1033人）

御巣鷹山の墜落現場

1983
・「NHK海外たすけあい」キャンペーン開始

1975～94
・ベトナム難民援護

1974
・バングラデシュのサイクロン被害に救援（初の災害派遣）
・高齢者福祉施設を開設

バングラデシュでの救援活動

1966
・日本赤十字学園を設立
・日本赤十字武蔵野女子短期大学を開校

1960
・愛の献血運動開始
・コンゴ動乱で、戦後初めて海外に医療班を派遣

1952
・血液銀行東京業務所設置
（64年「血液センター」に改称）
・「日本赤十字社法」制定

移動採血車を配備して全国に血液銀行を開設（1961年）

1948
・赤十字奉仕団結成
・共同募金と合同で募金運動を初めて実施
・救急法、家庭看護法、水上安全法開始

街頭での募金活動（手前左から三笠宮妃殿下、高松宮妃殿下、秩父宮妃殿下／1954年）

1934
・赤十字国際会議を東京で開催

原爆投下後の日赤広島県支部
（米軍撮影、広島平和記念資料館提供）

式典に参加する少年赤十字団代表ら

関東大震災では193カ所で56万人超を救護

1931～45
・満州事変、日中戦争、第二次世界大戦での救護

第二次世界大戦では3万人以上の救護看護婦を派遣

1921
・児童健康相談所設置
（児童福祉事業の開始）
・助産師養成開始

1922
・少年赤十字活動開始
（現 青少年赤十字）

1923
・関東大震災で救護

平成29年5月1日（毎月1日発行） 第924号（昭和24年9月30日 第三種郵便物認可）

FEATURE

1941～45年　戦時救護

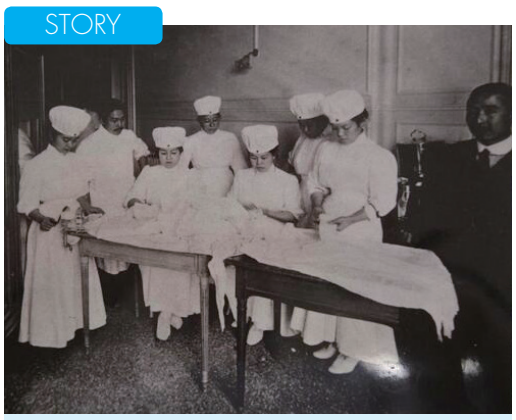
第二次世界大戦

最期まで人としてのふれあいを

元日赤救護看護婦 久米正子さん（佐賀県在住）

1920年生まれ。41年、日赤山口支部救護看護婦養成所を卒業後、４月に召集。佐賀第289救護班として華北（中国北部）太原陸軍病院に派遣。その後、佐賀第477救護班として南方シンガポールの第101海軍病院、氷川丸などで救護にあたり、終戦間際に帰国。45年に岩国で被爆者救護にあたる。戦後も看護師として働き、看護師養成なども務めた。

STORY



日中戦争勃発から第二次世界大戦終結までは、960班を派遣。延べ3万3156人の救護看護婦たちが各地の陸海軍病院や病院船で救護活動にあたった。

兵隊さんの「かあちゃん」に

学校を卒業したとたんに召集令状が来て、中国へ渡りました。初めは病院の環境に慣れなくて。麦ご飯にハエがびっしりたかるような、日本では考えられない衛生状態です。その中で、毎晩７時から９時くらいの間に負傷した兵隊さんが運ばれてきました。

忘れられないのが重症病棟の担当をしていた頃のこと。看護の傍ら、ご家族や恋人の写真を見せていただいたり、世間話をしたり、せめて心の支えになれたらと元気にお世話をしていました。すると、患者さんたちから「かあちゃん」と呼ばれるようになったのです。まだ20代前半ですよ。ただ、１人の気丈な患者さんは、私を絶対に「かあちゃん」とは呼びませんでした。

第二次世界大戦中、派遣されていた同僚たちとともに撮影

ある日、その方に「かあちゃん」と呼び掛けられ、「お茶」と一言。お茶を持っていくと「かあちゃん、ごめんね」とおっしゃるのです。その患者さんは症状が日々悪化していて、自ら先の短いことを悟られていたのかもしれません。

病院内の火葬場では、毎日亡くなった方が焼かれました。せめて自分が看た患者さんの骨は１本でも多く拾いたいと、最後は手で拾って骨つぼに収めていました。学校で学んだ赤十字の精神が自分の支えとなり、どんな状況でも救護にあたれたのではないかと思っています。

看護婦さんの背中の温もりに涙した日

山本さんは陸軍の軍人でした。24歳のときに狙撃され、奉天の陸軍病院で腸を切除する手術を受け、病院船で帰国の途についたとか。重症のため、一番揺れが小さい船底の病室にいたといいます。その病室で献身的に看護してくださったのが四国出身の日赤の看護婦さんだったそうです。関門海峡を通過するときには、「日本に帰ってきたよ」と、船底から甲板まで、大柄な山本さんを背負って連れて行ってくれた、と。「あの背中のあたたかさが忘れられない」といつも言っていました。

山本さんは、“祖国を立て直すために救けられた命”と考え、日赤への感謝と“敵味方の区別なく救う”赤十字の信念への共感を込めて社会貢献のためにと寄付を続けていました。私もその考えに深く共感しています。（松尾さん談）

2015年に亡くなられるまで、長年日赤を支えた山本さん（中央）。紺綬褒章を38回、平成６年に勲五等瑞宝章、平成８年に厚生大臣表彰を受章

故・山本庄太郎さんを知る
松尾晶子（せいこ）さん（長崎県在住）

長崎県で昆布海産物商を営む傍ら、日赤を支えた山本庄太郎さんの右腕として活躍。戦時中の看護婦への感謝を胸に長年にわたって寄付を継続された山本さんと共に、日赤を支援している。

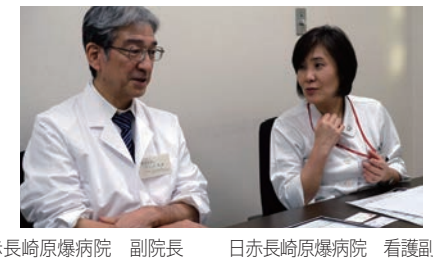
理念とともに歩む赤十字 Ⅱ

あの日々を忘れない

1990～96年　災害支援

雲仙普賢岳噴火

平時からの訓練が重要な災害医療



元日赤長崎原爆病院　副院長
上田康雄さん

上田医師は、糖尿病の専門医として同院に34年勤務、現在は外来診療を週1回担当。同院の救護班医師だった。

日赤長崎原爆病院　看護副部長
谷尾佐知子さん

谷尾看護副部長は当時６年目の看護師で、救護班メンバー。現在DMAT資格も取得、後進の育成にもあたる。

大火砕流の約１カ月後、島原新港のゆうとぴあ船内で診療にあたる上田先生

STORY

1990年11月に始まった長崎県雲仙普賢岳の噴火。翌６月には大火砕流が発生、43人の犠牲者を出した。日赤は救援物資を配布したほか、７月11日までに医療救護班を13班派遣。義援金の受付を行った。

災害医療への意識が変わった

６月３日の大火砕流の後、救護班として避難所への巡回医療に２回加わりました。最初に訪れた避難所は島原市立体育館です。絶え間なく降り続ける火山灰のため、目やノドの異常を訴える人が多く、大量の目薬を処方しました。さらに問題だったのが避難所の環境。体育館はすし詰め状態で、満足に休息をとることもできません。精神的なストレスから体調を崩す方もいました。

現在ほど災害医療やDMAT（災害派遣医療チーム）の重要性が認識されていなかった時期。どのように準備しておけば、緊急時でも平常時と同様に被災者に適切なケアを施せるのか。平時の備えの重要さを、この災害を機に改めて考えるようになりました。（上田）

避難所へ救援物資を運ぶ日赤職員

＊＊＊

現地入りしたとき、見渡す限り灰色のどんよりした風景が広がっていたことが忘れられません。

避難所はトイレなどの衛生環境が悪くなりがちです。トイレに行きたくないから何も食べない人、持病で不安になる人などが多く、精神的なケアが課題になりました。被災された方のつらさは計り知れないですが、少しでも理解したいという思いで寄り添うことはできます。このときの体験を糧に、災害救護にあたる心構えなどを若い世代へ伝えています。（谷尾）

全てを失った日。毛布の手触りが忘れられない

私はケガも軽傷で、偶然助かりました。ですが、畑も家も全部灰色になって、小さな子どももいるし、明日からどうしようかと途方に暮れました。そこに赤十字マークの毛布が支給されたのはよく覚えています。ゴワゴワした肌触りなのですが、避難所だった体育館の硬い床の上で、マットにもなってくれた。あれはありがたかったです。食事や救援物資も届き、義援金も本当に助かりました。

私の場合は、当時は若くて元気でしたから、仕事のために日中は避難所にいませんでした。だから、日赤の医療班と遭遇したことはありません。ただ、同じ避難所にいた高齢の方たちから「腰が痛いのを診てもらった」「薬をもらえて安心」というような話をよく聞きました。このような状態でも医療班が駆けつけてくれるのは、避難している人にとって安心材料だったと思います。

あの日、灰に覆われたタバコ畑も数年かけて再生

火砕流から助かった消防団員
福島茂さん（長崎県在住）

1950年生まれ。たばこ栽培を営む。被災当時、地元消防団員は土石流を警戒して巡回中だった。大火砕流が起きたときは偶然、中腹の消防分団詰め所から移動中で、車に飛び乗り間一髪で避難。しかし、消防団の仲間たちを大勢失った。

1996～97年　国際的な支援

ペルー日本大使公邸人質事件

中立性を守り続ける困難さに学ぶ

STORY

©ICRC

1996年12月、ペルーの首都リマで日本大使公邸に14人の武装グループが乱入。民間人を含む約600人を人質にした。ICRCの仲介により500人以上が解放されるも、72人は拘束されたままだった。翌年４月22日、ペルー政府の軍事介入により事件は終結、日本人は全員生還したが、ペルー人の人質１人とペルー軍人２人が犠牲となった。

公邸内の人々に食料や水などを届けるICRC職員
©J.Martin / ICRC

東京都赤十字血液センター
廣田香織さん

事件当時、日赤本社国際部国際救援課に勤務し、世界各地の紛争や災害に対応。事件後、日赤チームメンバーとして、医師や看護師たちとともに現地入り。人質とご家族のこころのケアに努めた。

拘束された人々への面会を求めて公邸に向かうICRCの3人。中央が当時の廣田さん

判断ミスが人質の命を危うくする責任

この仕事で心を砕いたのは、「中立性を守れているか」ということ。例えば、食事一つとっても、もし人質の人数分しか差し入れなければ、それらは武装グループに取り上げられ、人質には渡りません。一つ判断を間違えば、人質に会えなくなり、その命にかかわってしまう。私たちは、人質となった皆さんが、解放まで心身ともになんとか無事に過ごせるように手を尽くしました。

公邸内への訪問が可能になってからは、人質になっている方にはご家族の状況やときには日経の株価まで、ご家族には人質となった方のご様子、公邸内の様子をできるだけ細かく伝えるようにしていました。

拘束されている人々と家族を結ぶ手段は「赤十字通信」という手紙です。この手紙はペルー政府と武装グループから検閲が入るため、スペイン語に翻訳する際には細心の注意を払いました。拘束された日本人の皆さんは、年齢的にも社会的にもさまざまなものを背負った人々。私たちは、「赤十字通信」に書けない伝言を、業務上許される限りご家族に伝える、よろずメッセンジャーでもありました。これも、被害者とその家族の精神的な均衡を守るために必要なことだったと思います。

人道支援を得て生き抜いた人質127日間

大爆発音が聞こえたのですが、最初は何が起きたのかわかりませんでした。それが120日を超す人質生活を強いられようとは……。ICRCの仲介のおかげで、水と食料は数日後に届けられるようになりました。体や汗を拭うための水、定期的に洗濯された衣類や書籍、赤十字通信と呼ぶ文通が可能になり、家族と連絡がとれるようになったのは大きかった。また、武装グループが監視する中、ICRCの鈴木隆雄医師の再三の訪れは、心の支えとなりました。

我々がとりあえず無事に過ごせていたのは、ICRCが人道支援と中立のもと、関係機関と交渉をしていたからです。当時、いかに人質生活に不可欠な物質的支援や精神的・肉体的保全の支援をしていただいたのかを思うと、今でも感謝でいっぱいです。（瀧滋）

＊＊＊

事件の一報が入った日は、生まれて初めて途方に暮れました。ペルーのICRC本部で廣田さんを見かけ、「主人はどうしていましたか？」と駆け寄りましたら、「お元気でしたよ」と笑顔で応えてくださって。ほっとして緊張が解けたことを覚えています。廣田さんをはじめ、現地のICRCの方々には、個人的な不安やお願いを聞いていただけて、崩れそうだった心をなんとか持ちこたえることができました。（瀧哲代）

日赤の140年は、
常に現場で支援に奔走した職員やボランティア
一人一人が積み上げてきた日々の集大成でもあります。
ここでは、戦時救護・国際支援・災害支援・青少年赤十字に
それぞれかかわった方々に、当時の思いを尋ねてみました。

人質として127日間拘束された瀧 滋さん・
現地で夫を支え続けた哲代さんご夫妻（兵庫県在住）

瀧滋さんは1938年生まれ。事件当時、ペルー松下電器現地法人社長。事件後も経営にあたり、事件から１年後に定年を迎え松下電産を退職。哲代さんは95年の阪神・淡路大震災で被災後、日本で事件を知り、ペルーへ急行。

事件後、焼け跡から奇跡的に見つかった瀧さんのベルトのバックル。「いろいろな意味で捨てられません」と瀧さん

拘束中に２人が交わした赤十字通信の一部。通信はファイル２冊分にのぼった

1948年～　赤十字奉仕団

子どもたちが「日常」に戻れる活動を

名城大学薬学部青年赤十字奉仕団

名城大学薬学部青年赤十字奉仕団
増田早紀さん（愛知県在住）後列左端

現在大学３年生。大学入学後に名城大学薬学部青年赤十字奉仕団（結成1967年）に参加。多忙な学部に所属しているが、子どもたちが楽しみにしてくれていること、子どもたちに元気をもらっているから活動を続けられるそう。

赤十字奉仕団の特色は、人道的な活動を実践すること。市区町村など一定の地域で組織する「地域赤十字奉仕団」、学生や社会人で組織する「青年赤十字奉仕団」、アマチュア無線や語学など特殊技能を持った人で組織する「特殊赤十字奉仕団」など、全国で2802団、約128万人が登録。

子どもと工作を楽しむ「やごとひよこ隊」のメンバー

「楽しかった～！」に励まされて

毎週水曜日に、「やごとひよこ隊」として、毎回、５～８人くらいで、小児病棟を訪問しています。子どもたちと工作をしたり、カードゲームをしたりして遊ぶ活動です。

さまざまな年齢の子どもが楽しめる工作、長期入院の子ども向けの工作を毎週考えるのは大変です。感染防止や音の関係で、作れるものに制限もあります。でも、最初はなかなか打ち解けてくれない子や、保護者を通してしか会話が成り立たない子が、工作が終わる頃には、すっかりなじんでくれるのはうれしいです。「もっと工作をしたい」「楽しかった～！」という言葉は励みになります。

ここでの体験が楽しくて、自分も「ひよこ隊」に入ろうと名城大を目指す子もいます。

活動の終わりは、長期入院を連想する「またね」などの言葉は使わず、「おやすみなさい」「来てくれてありがとう」で閉じるなど、安全面以外でも配慮は必要です。この活動が、子どもたちの「日常」を取り戻す時間になってくれたらうれしいです。

「早く工作をしたい！」と心待ちに

「入院中は、接する人も医師や看護師など医療関係者に限られ、閉鎖的な生活になりがちです。そんなときに、ひよこ隊のお姉さんやお兄さんと一緒に遊ぶことは、お子さんも保護者も少し日常に戻れます。心待ちにしている子どもたちもいますし、みんな楽しそうですよ」（中内真由美看護師長／名古屋第二赤十字病院小児科）。

「検査やリハビリ以外は小児科フロアから出ることができません。１週間、娘と二人っきりで病室にいると親子ともに煮詰まってしまいます。１時間でも、優しいお兄さん、お姉さんに遊んでいただけることで、子どもも治療中であることを忘れられ、本当に楽しそうでした」（４歳のお子さんと参加されたお母さん）。

平成29年5月1日（毎月1日発行） 第924号（昭和24年9月30日 第三種郵便物認可）

FEATURE

理念とともに歩む赤十字 Ⅲ

History of the International Red Cross

国際赤十字154年の足跡

「傷ついた兵士はもはや兵士ではない。人間である。人間としてその尊い生命は救わなければならない」――アンリー・デュナンの信念に賛同した人々が設立した「五人委員会」。ここから「人道」と「中立」を旨とした赤十字運動が始まりました。

赤十字が誕生して154年、世界の情勢はますます複雑化し、自然災害などは増えるばかりです。国際赤十字は、さまざまな状況下で苦しみのなかにある人々を人道的に支援し続けています。この先も人間の命と尊厳を守るためにできることは何か。それを考えるために、154年の足跡をたどります。

ソルフェリーノでデュナンが救護にあたる様子
アルマン＝デュマレスク《篤志の救護者》

赤十字の創設者
アンリー・デュナン
（1828-1910）

スイスの実業家。1859年のイタリア統一戦争の激戦地、ソルフェリーノで放置されていた多くの死者・負傷兵の救護にあたる。この体験を機に、各国に中立的な戦時救護の団体を組織することなどを欧州で訴え、1863年、赤十字国際委員会の前身「五人委員会」を創立。1864年のジュネーブ条約の調印に貢献する。1901年、第１回ノーベル平和賞受賞。

ソルフェリーノの戦いと「赤十字思想」の誕生

デュナンは、1859年の悲惨な光景に出会い、「傷ついた兵士は、もはや兵士ではない。人間である。人間としてその尊い生命は救わなければならない」という信念のもと、敵味方なく救護活動をしました。３年後、この体験をもとに『ソルフェリーノの思い出』という本を執筆します。この本の中では、次の３つの必要性を訴えました。

①戦場の負傷者と病人は敵味方の区別なく救護すること
②そのための救護団体を平時から各国に組織すること
③この目的のために国際的な条約を締結しておくこと

この主張が「赤十字思想」の誕生であると言えるでしょう。

1862年に出版された、
『ソルフェリーノの思い出』
日赤本社の情報プラザで初版を保存・展示

1859 デュナン、「ソルフェリーノの戦場」で敵味方なく傷病兵を救護

1862 デュナン、『ソルフェリーノの思い出』を出版

赤十字が誕生した、ジュネーブ条約の調印式のもよう

1863 赤十字国際委員会の前身「五人委員会」設立、赤十字規約の成立

1864 ジュネーブ条約（赤十字規約）に16カ国が調印
ベルギーを筆頭にヨーロッパ諸国で負傷者救護協会の設立が始まる

1872 五人委員会が名称「赤十字」の公式採用を各救護協会に勧告

1875 五人委員会、赤十字国際委員会（ICRC）へ改称
ロシア赤十字社、国内で起きた大規模火災の被災者を支援＊
世界初の平時の災害救援活動

1901 デュナン、第１回ノーベル平和賞受賞

第一次世界大戦中にICRCが活動資金を得るために販売したポストカード ©ICRC

1914～18 第一次世界大戦
各国赤十字社は看護師などを野戦病院に大規模派遣、傷病兵の戦時救護にあたるICRC、国際捕虜情報局を開設。
戦時捕虜の保護と離散家族を支援

1917 ICRC、ノーベル平和賞受賞

＊平時の災害救護活動

戦時救護から始まった赤十字の活動ですが、平時の災害支援の歴史は、1875年にロシアのモルチェンスク市（モスクワの南東350キロ）で起きた大規模火災の被災者を、ロシア赤十字社が支援したことに始まりました。その後、各国赤十字社が次々に平時の災害救護活動へ乗り出していきます。

第一次世界大戦に従軍した看護婦（ドイツ）
©ICRC

人道法の始まり

こんにち、「**国際人道法**」と呼ばれる戦争犠牲者の保護や救済のための国際法は、1864年に締結された「**ジュネーブ条約**」に端を発します。この条約は、戦争時の陸軍・海軍の傷病兵や捕虜、民間人を守ることを目的としました。そこには救護のほか、「捕虜となった兵士や民間人は敬意をもって扱うこと。彼らは家族と連絡をとることが許される」「民間人やその財産をわざと攻撃することを禁じる」といった内容が盛り込まれていました。

1864年、1回目の調印式では12カ国が調印。その後４カ国が同年に調印した。

2016 世界人道サミット開催。ICRC総裁、国際人道法の尊重について声明発表

人道的停戦の合間をぬい、高齢者を避難させるICRC とパレスチナ赤新月社職員。イスラエル・ガザ地区にて ©Rama Humeid / ICRC

2011 国際赤十字、シリア人道危機支援活動開始
シリア赤新月社の救援活動をサポート

2009 日赤近衛社長、アジア人初の IFRC 会長に選出

ケニアのナイロビで開催されたIFRC（国際赤十字・赤新月社連盟）総会（2009 年）

救援物資を運ぶICRC の車両　©ICRC

2004 スマトラ島沖大地震津波

2001 アメリカ同時多発テロ勃発
以降、人道支援組織を標的にした事件が増える

1991 赤十字社連盟、国際赤十字・赤新月社連盟（IFRC）へ改称

アフリカを襲った大飢饉。赤十字から緊急食料支援が行われた　©ICRC

1984 アフリカ飢餓

1975 ベトナム戦争終結

1950 朝鮮戦争勃発

捕虜向けの救援物資で埋まる、スイス・バーゼルの ICRC倉庫。第二次世界大戦中の記録　©ICRC

1949 第二次世界大戦後、
一般市民の保護や支援が拡充された
「ジュネーブ諸条約」成立

1948 「世界赤十字デー」制定

1939～45 第二次世界大戦
ICRC と各国赤十字社は、戦地へ救護要員を派遣。傷病兵と戦災被害にあった市民の救護にあたる

1919 各国赤十字社の国際的連合体として、
日本など5社の提唱により
赤十字社連盟（LRCS）発足

3つの赤十字

ICRC 赤十字国際委員会 80カ国以上・93拠点*

国際赤十字・赤新月社連盟 60カ国以上に代表部

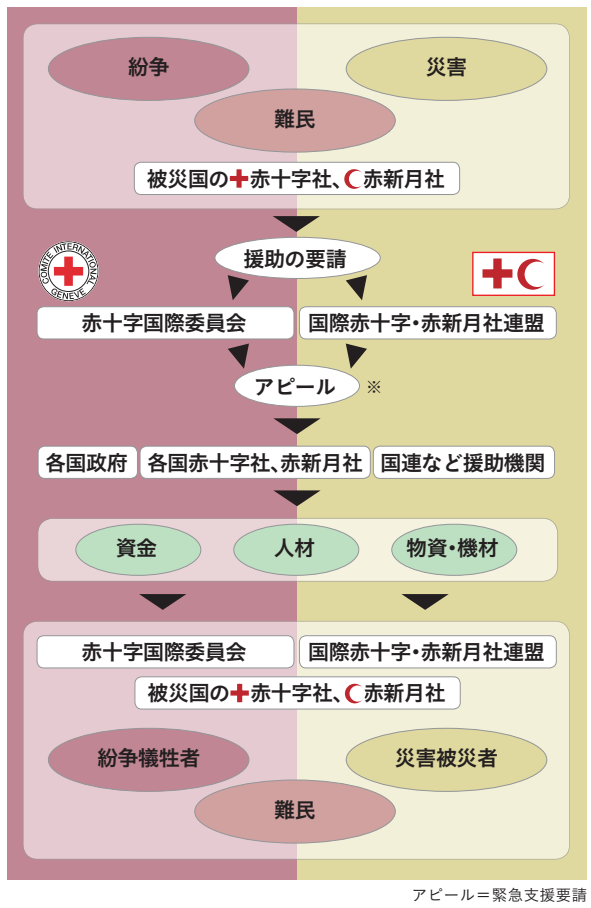
各国赤十字・赤新月社

- 赤十字社 155社
- 赤新月社 34社
- イスラエル・ダビデの赤盾社 1社

（*2015年現在、ほかは2016年現在）

赤十字の国際援助システム

赤十字は、紛争や暴力を伴う状況下での支援・保護を行う「赤十字国際委員会（ICRC）」と、災害（人的・自然）や難民の支援・調整活動を行う「国際赤十字・赤新月社連盟（IFRC）」、そして各国にある赤十字社・赤新月社が下記のように連携し、困難に直面する人々を救援しています。



アピール＝緊急支援要請

赤十字国際委員会

ICRC

赤十字国際委員会は、本部がジュネーブにあり、おもに戦争および紛争地域の一般市民の傷病者、難民などへの医療援助、食糧援助などの救援活動を展開するとともに、ジュネーブ諸条約などの普及にも努めています。ノーベル平和賞３回受賞。

国際赤十字・赤新月社連盟

国際赤十字・赤新月社連盟は、おもに地震、洪水などの災害発生時の救護活動、または発展途上国の各社による人々の疾病予防、災害の防止などの開発協力活動を行っています。連盟の設立は1919年５月５日で、本部はジュネーブにあります。ノーベル平和賞１回受賞。

知って いましたか こんな 雑学（トリビア）

TRIVIA

**今年の５月で、日本赤十字社は140年を迎えました。
長くて深い歴史の中には、
有名な出来事も数多くありますが、
あまり知られていないこともたくさん潜んでいます。
ここでは、とっておきのトリビアとして、
「知る人ぞ知る赤十字」を紹介します。**

TRIVIA

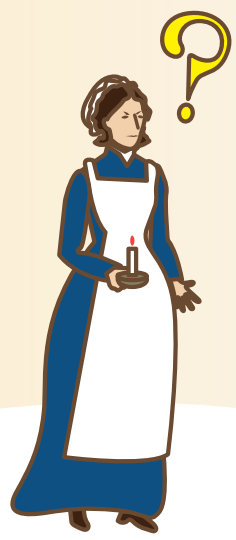
1.

ナイチンゲールが創始者？の誤解

国際赤十字の創設を提唱したのは、スイス人のアンリー・デュナン（６ページ参照）です。ところが、イギリス人のフローレンス・ナイチンゲールが創設者と誤解している人が少なくありません。しかし、実は彼女は赤十字の創立には関わっていないのです。

ナイチンゲールはクリミア戦争（1853～56年）で38人の看護婦を率いてイギリス軍に従軍し、イギリスの負傷兵を救護しました。その活動を知ったデュナンは、自著で彼女を称賛しています。

ところが、当のナイチンゲールは当初、欧州各国に負傷兵救護団体の設立を呼び掛けたデュナンの考えに対し、「兵士の救護は政府の義務であるべき」とのことから反対の立場でした。しかし、その後、晋仏戦争などの実態を見るうちに、中立の赤十字の意義を認め、その後、イギリス赤十字の創設に尽力したのです。



TRIVIA

2.

白い羽根？ 赤い羽根？ 募金の誤解

創立当初から、日本赤十字社は「社員」（支援者）の「社費」（会費）や寄付で、活動の資金を賄ってきました。けれども、第二次世界大戦の終結直後は財政的に厳しく、1950～58年には街頭で寄付金を募っていました。５月の「“白い羽根”赤十字募金」です。藤山一郎がテーマソングを歌い、日赤名誉副総裁の妃殿下方も募金箱を持たれ銀座にお立ちになりました。

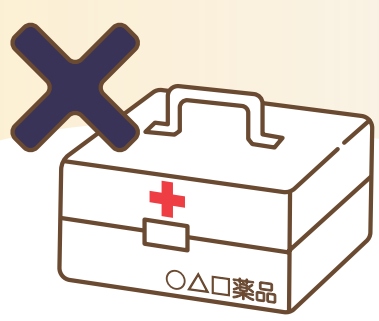
一方、1947年に市民が主体となって始まったのは、10月１日から年末までの「“赤い羽根”共同募金」です。ある年、両者が合同で募金をしたことがありました。それが原因か、「羽根の赤」と「赤十字の赤」と色で混同されたのか、「“赤い羽根”共同募金」が赤十字の主宰だと誤解している方が今もいるようです。青い羽根、黄色い羽根、水色の羽根、緑の募金も日赤の活動とは関係ありません。

TRIVIA

3.

赤十字マーク、勝手に使うのは違法!?

赤十字のマークは、戦争や紛争などで傷ついた人々とその人たちを救護する軍の衛生部隊、赤十字の救護員や施設などを攻撃から守るために、中立のシンボルとして使用するものです。赤十字だけでなく、赤新月なども同様ですが、これらの使用法は法律（赤十字の標章及び名称等の使用の制限に関する法律）で規定されています。赤十字マークを使用できるのは、法律などに基づいて使用が認められている組織だけ。一般の病院や商品などに付けることは禁じられているのです。違反した場合は、6カ月以下の懲役又は300,000円以下の罰金を科されます。



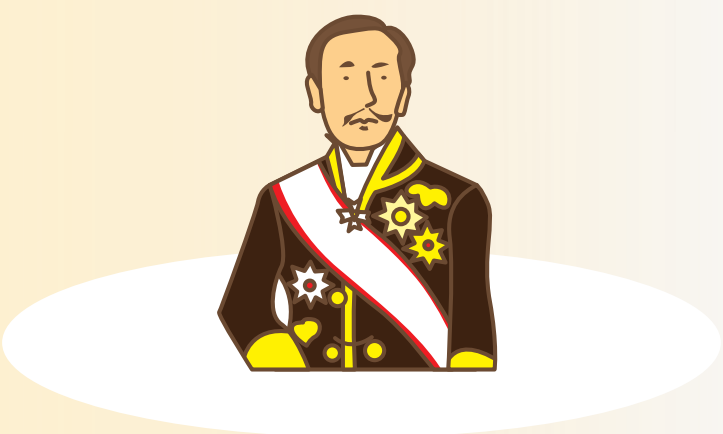
TRIVIA

4.

日赤の創始者は2人！

佐野常民が設立の「願い書」を提出した博愛社が日本赤十字社となり、初代社長に彼が就任したことから、「日赤の創始者は佐野常民」と思っている人が少なくありません。けれども実は、創始者は二人います。もう一人は佐野と同じ元老院議官だった大給恒（おぎゅうゆずる）です。実は、大給がいなければその後140年間、日赤の活動を支えた「社員制度（会員制度）」は成り立たなかったのです。

佐野が九州で医者を集めて救護活動をしていたとき、大給は東京で社員と社費（活動する資金）を集めていました。東京の事務所では、大給の一族が仕事にあたっていました。大給は元大給松平家で三河奥殿藩、のちに信濃田野口藩（竜岡藩）の藩主。全国に広い人脈があり、それが「社員」の拡充につながりました。東京・広尾の祥雲寺に行けば、大給の立派な墓に目を見張るかもしれません。



TRIVIA

5.

抗議の通訳は、文豪・森鷗外だった

日本はアジアで初めて赤十字社を立ち上げ、アジアで初めて国際赤十字・赤新月社連盟の会長（現 日赤社長・近衛忠煇）を輩出しています。国際的に存在感の大きい国だと言えるでしょう。けれども最初からそうだったわけではありません。

1887年に第4回万国赤十字総会（赤十字国際会議）がドイツで開かれたときには、「赤十字条約（ジュネーブ条約）をヨーロッパ以外の国にも適用すべきか」が議題に上りました。アジア人に崇高な理念はわからないだろうという当時の偏見の表れです。

憤慨したのは会議に出席していた日本代表。ドイツ語の通訳に森林太郎（後の森鷗外）を立てて毅然と抗議しました。森鷗外は『舞姫』などで有名な文豪です。東京帝国大学医学部を卒業し、当時はドイツ帝国陸軍の衛生制度を調べるためにドイツに留学していました。

TRIVIA

6.

災害救護活動の先駆けは昭憲皇太后

100年以上前から今もなお世界に貢献を続けている「昭憲皇太后基金」（13ページ参照）を生み出した昭憲皇太后は、先見の明をお持ちでした。「洋服の時代が来る」と見て、ご自身も洋装に身を包んだ初めての皇后となりました。戦争で傷ついた兵士のために、宮中の女官と一緒に包帯を作るなど、弱者への慈愛もおありでした。命日の4月11日には、明治神宮で昭憲皇太后祭が開かれています。

1888（明治21）年に会津磐梯山が噴火したときには、日赤は皇后陛下のご内旨があったことなどから救護員を派遣することを決めました。これが日赤の災害救護活動の先駆けとなりました。

TRIVIA

7.

関東大震災後、アメリカから「ウイスキー」が!?

1923（大正12）年9月1日、関東大震災が発生しました。死者約10万人の大惨事です。このときアメリカ赤十字社から日赤にウイスキーが届きました。未曽有の非常事態なのに、なぜ、そんなものが贈られたのでしょう。

実は、当時はお酒も薬でした。滋養強壮や、薬を飲みやすくするため、薬の調剤に使われていました。つまり、アメリカが贈ったウイスキーは「医薬品」の一つだったのです。西南戦争のときに博愛社が使った医薬品にも、赤・白葡萄酒（ぶどうしゅ）、ブランデー、シェリー酒が含まれていました。

贈られたウイスキーのラベルの裏側には、英語で「医薬品に限定」との文字。その中の1本は、今でも日赤本社の情報プラザで保存・展示されています。

平成29年5月1日（毎月1日発行） 第924号（昭和24年9月30日 第三種郵便物認可）

TOPICS

TOPICS

赤十字運動月間

2017年5月1日～31日

「あなたはその両手で何をしますか？」

5月は「赤十字運動月間」です。
困難な状況に立ち向かう人たちのために、
わたしたち一人一人にできることが、きっとあるはず。
その想いをこめて、全国に呼び掛けを行います。

今年度のテーマは、「人がいま、試されている」

今月号の表紙に掲げたメッセージは、2005年に開催された日本国際博覧会「愛・地球博」で、赤十字の理念と活動を象徴する呼び掛けとして掲げられました。そしてその言葉にこめた想いは、今年度のテーマにもつながっています。下に掲示したポスターをご覧になった方もいらっしゃることでしょう。このポスターでは次のように呼び掛けています。

この同じ空の下で、
困難な状況に苦しんでいる人がいる。
失われた日常を取り戻すために
闘っている人がいる。
想像をはたらかせること。
忘れないこと。
手を差し伸べ続けること。
救けを必要としている人がいるかぎり、
予測できない未来があるかぎり、
私たちにできることはきっとある。
この国がいま、私たちがいま、
人がいま、試されている。

年間メッセージポスター

「ソラ編」

「メッセージ編」

いつものくらしをしている“私”たちが、同じ空の下で困難と闘う人々に対してできることは、きっとあるはずです。

「困難な状況にある人たちのことを他人事としてとらえるのではなく、自分のこととしてとらえ、考えていきましょう」。

「そして自分ができる具体的な行動に結びつけていきましょう」。

赤十字運動月間にあたり、そのメッセージを人々に伝えるため、テレビCMやポスター、ウェブサイトなどを通じて、訴え続けていきます。

赤十字の活動への理解を呼び掛け

日本赤十字社の活動は、多くの人々の支援に支えられています。しかし、災害時に募金をしてくださる人々でさえ、日赤の人道活動の資金の大部分が寄付で成り立っていることを知っている方は多くありません。

この「赤十字運動月間」では、赤十字の目的や活動への理解を深めていただき、これからの日赤の活動に、さらなる協力をしていただけるよう、広く呼び掛けていきます。

世界の「空」と赤十字からのメッセージ

年間を通じて赤十字の想いを伝えるポスター。2017年度は、「ソラ編」と「メッセージ編」の2種類があります。「ソラ編」は限りなく続く青空に、“同じ空の下”にあるさまざまな状況を想像してもらうために。一方、「メッセージ編」は、“自ら”助けるための手を自分なりに差し伸べて行動を起こしてもらうために。2枚は対となって、皆さまに想いを伝えます。

「赤十字運動月間」主なキャンペーン活動

赤十字の活動をより深く理解してもらうために、赤十字運動をアピールする1カ月。
わたしたちの想いを伝えるCMやポスター、赤く染まるライトアップが日本中に広がります。

TV・ラジオCM・WEB

空の下で救いを求める いのちを想って

世界の「空」の映像が、その土地の「音」と共に流れる「ソラ編」を配信。音を少し大きくして耳をすましてみれば、「シリア」の空が映るシーンでは、微かに現地のヘリの音が、「陸前高田」のシーンでは、その海の音が聞こえてきます。ぜひ、画像に映る空の下の人々に思いをはせながらご覧いただきたいCMです。

画像は、シリアの空も映し出す

東日本大震災の被災地・陸前高田を思う

SNSでご協力を

赤十字運動を広める口コミにご協力ください。QRコードから特設サイトへアクセスできます。ぜひ、URLをフェイスブックやツイッター、ラインなどのSNSに発信してください。

運動月間ポスター

支え合う赤十字活動を 紹介するポスター

「活動資金募集」を呼び掛けるポスターとして採用されたのは、熊本の被災地で長野名物・五平餅をふるまう長野県の奉仕団の活動。2016年11月末に、手弁当で駆けつけ、被災地の人々に元気を届けました。

「赤十字運動月間」の期間のみ掲示されます

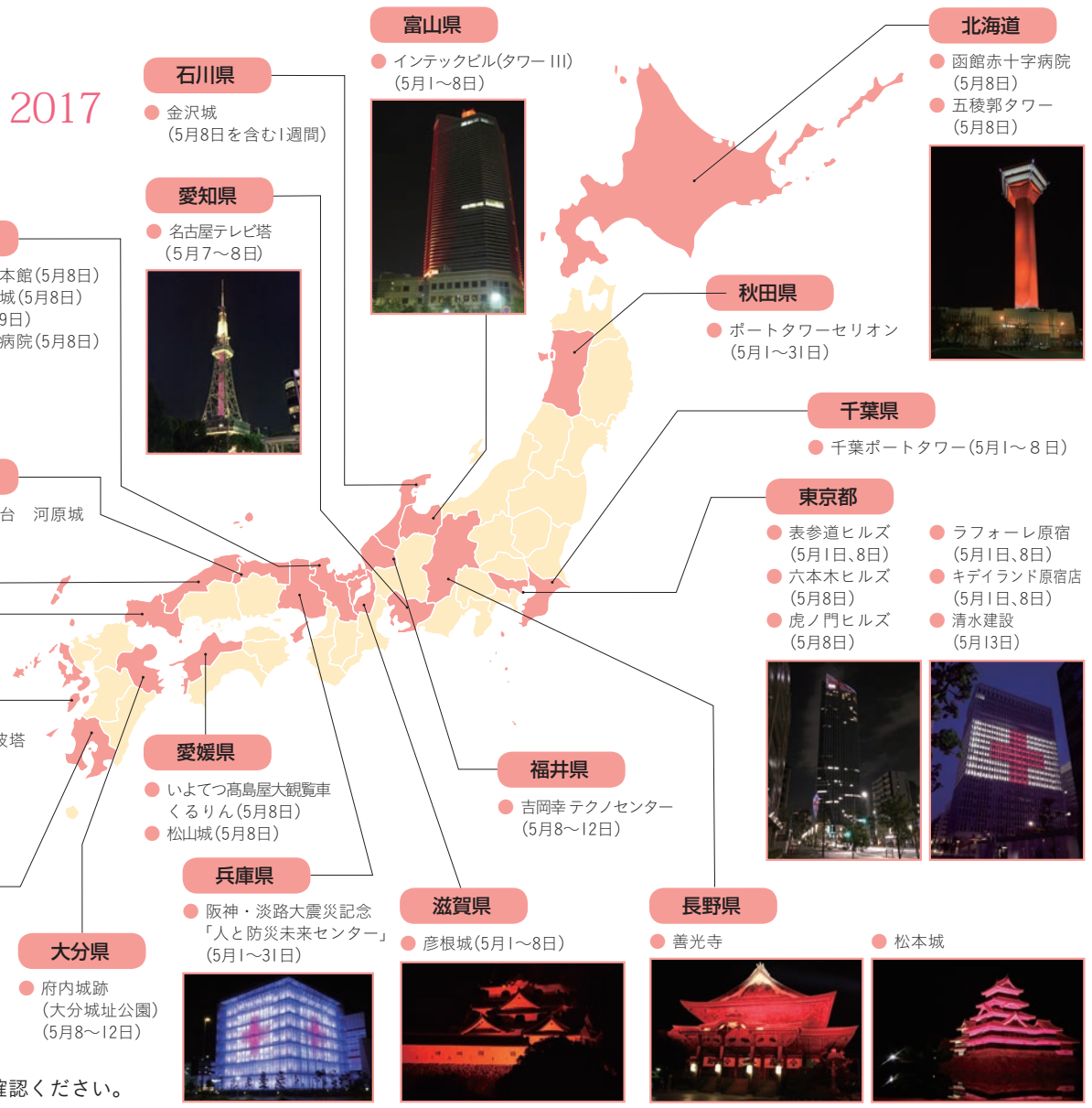
各地で展開する活動

４月後半から５月末まで行われる、赤十字の理念を伝える啓発活動と募金活動。全国の各都道府県支部や役所、役場の赤十字窓口、青少年赤十字などが活動を担います。

世界赤十字デー

日本中にシンボルカラーが浮かぶ レッドライトアッププロジェクト2017

５月８日は、世界赤十字デーです。赤十字の創始者アンリー・デュナン生誕の日にちなみ、1948年に制定されました。日本赤十字社では、紛争や災害で苦しむ人々に寄り添い、デュナンが強く訴えた「人道」への理解を深めていただくことを目的として、この日を中心に、「レッドライトアッププロジェクト2017」を実施します。５月上旬には、国内の歴史的建造物やランドマークとなる施設、企業さまなどにご参加をいただき、全国を赤い色で彩ります。



※写真は昨年の様子

ライトアップの開催情報は「赤十字運動月間」特設サイトをご確認ください。

AREA NEWS

健康的な生活や未来を支援するために。
日本各地、あなたの生活のすぐそばで、
日本赤十字社の事業は行われています。

熊本県

過酷な環境を乗り越えて救援事業を終えた医師が無事帰国

昨年12月13日～今年３月12日までの約３カ月間、赤十字国際委員会(ICRC)の「南スーダン紛争犠牲者救援事業」に派遣されていた麻酔科、大塚尚実医師が任務を終え帰国。３月14日、熊本赤十字病院で出迎え式が行われました。

紛争により不安定な情勢が続く南スーダン共和国。大塚医師は、「３カ月間で約200件の手術を担当したが、約７割が紛争犠牲者だった。これからも救援活動に携わって現地の方の役に立ちたい」と報告しました。

日中40度を超える気温の中、時には野外テントで診療を行ったという大塚医師

広島県

日赤初！　航空会社と「災害時の相互協力に関する協定」を締結

日本赤十字社広島県支部は３月24日、広島県庁で株式会社せとうちSEAPLANESと「災害時等における救護活動への相互協力に関する協定」の締結調印式を行いました。

近年、高い確率で発生すると予測されている南海トラフ地震。中国四国地方の拠点である広島県から、迅速に救護活動にあたる必要があります。今後は、同社所有の水陸両用機で救護資機材・輸血用血液等を空輸することが可能となり、災害救護体制の充実を図ることができました。

株式会社せとうちSEAPLANESの代表取締役社長・松本武徳氏（左）と、日赤広島県支部長の湯﨑英彦氏

香川県

学校内の減災を目指し中学校で防災啓発活動を実施

３月、高松市立勝賀中学校において、「命を守るために」と題した防災啓発活動が行われました。生徒・教職員一人一人が「災害時に必要なこと」などをメッセージカードにつづり、３月14日から31日まで同学校内に掲示。互いに考えを共有することで防災意識を高めました。

東日本大震災から今年で６年。記憶を風化させないため、またこれから起こりうる災害に備えるため、全国的に防災・減災活動の取り組みが青少年赤十字加盟校を中心に強化されています。

一人一人の防災意識を高めることが、学校全体の減災につながる取り組みとなりました

福井県

「孫の力」を借りて脳卒中の早期発見を！

あわら市芦原小学校で、脳卒中の早期発見ポイントを伝える出前授業を行いました。講師は福井赤十字病院の脳神経外科部長、早瀬睦医師。

脳卒中は早期発見・治療が重要です。三世代同居・近居や共働き率が高い福井県。主な脳卒中発症年齢である高齢者が、小中学生の「孫世代」と時間を共にすることが多いことに着目し、今回の授業を実施しました。参加児童からは「家族にも伝えたい。脳卒中のことがよく分かってよかった」との声がありました。

脳卒中で見られる症状を、実際に体験してもらいながら紹介。「この症状が出たらすぐ病院へ」と呼び掛けました

大阪府

積極的なボランティア参加のために高校生がリーダーシップを学ぶ

３月19、20日の２日間、大阪府貝塚市にある大阪府立少年自然の家で「青少年赤十字高校生リーダーシップ・スタディー・センター」が行われ、府内の19校から42人が参加。ボランティア活動などに積極的に参加する「リーダー性」を養う、さまざまなプログラムを行いました。

生徒はグループワークやフィールドワークなどを体験。「グループで協力するうちに仲良くなれ、自分の協調性も上がってよかった」と充実の２日間を振り返りました。

赤十字の活動や国際人道法、ボランティア活動、救命手当てなどを学んだ高校生たち

静岡県

災害時の食事を支援するレシピ集「炊き出し名人 vol.2」

日本赤十字社静岡県支部は、県内５院の赤十字病院の管理栄養士が考案した炊き出しレシピを集めた「炊き出し名人vol.２」を作成しました。

同支部では、１人分の食事を一つの袋で作ることや、袋ごとで異なる食材を入れて調理することが可能な“包装食袋”を使った炊き出しを推奨。今後、県内の地域赤十字奉仕団にも協力いただき、同レシピを活用しながら“将来の備えのひとつ”となる炊き出しを広めていきます。

同支部は、東日本大震災から炊き出しの重要性を再認識。平成27年に第１弾の「炊き出し名人」を作成しています

徳島県

徳島大学ラクロス部員笑顔で献血に協力

３月28日、徳島大学ラクロス部員が献血ルーム・アミコで献血に協力してくれました。当キャンペーンは平成16年に始まり、今回で14回目。37人が参加してくれました。

初めて献血したという部員は「明るいし、きれいだし、漫画や飲み物があって快適でした」と話しました。部員たちは「けんけつちゃん」の耳を着けて写真を撮るなど、終始楽しそうに献血に取り組まれました。当日は400mL全血献血に21人、成分献血に１人のご協力をいただきました。

「ラクロス部で初めて献血をしてから、年３回するようになりました」という部員も

支援者の声 ～献血の現場から～

「苦しんでいる人を支えたいから、献血を続けています」

徳島県赤十字血液センターを来訪した藤倉利幸さん（65）。献血を始めたきっかけは東日本大震災だと話します。「震災では友人が被災。目の前で津波にのまれる人を見て心を病んでしまいました」。震災により血液事業が大変な状況だと知り献血を続けています。

「災害に対して、備えが必要なのは逃げる準備だけでなく、心の準備も必要だと知りました。今できることを、悔いが残らないようにしておきたいです」。

31回目となる献血にご協力くださった藤倉さん

滋賀県

90年の時を経て……　カナダから帰国「成績帖（野洲郡連合少年赤十字団）」

1926（大正15）年に当時の野洲郡（現在の滋賀県野洲市・守山市周辺）の子どもたちが国際交流の一環としてカナダに送った「成績帖（ちょう）」と題した交換アルバムが、このほど日系カナダ人の新納あんぬさんから返却されました。

「成績帖」には作文、習字、図画など約50点が収録。大正期に盛んであった少年赤十字（現在の「青少年赤十字」）による国際通信交換の貴重な記録であり、日赤滋賀県支部は成績帖を日赤本社の情報プラザに寄託することとしています。

成績帖はカナダのカムループス市にある日系文化会館内の資料館で、詳細不明の資料として保管されていました

常任理事会開催報告

平成29年４月21日、本社において平成29年度第１回の常任理事会が開催されました。

今回の常任理事会は年度初めでもあり、付議事項はありませんでしたが、国際活動における安全管理、核兵器の禁止及び廃絶にかかる国際赤十字・赤新月運動会議及び予算の補正にかかる２月及び３月分の社長専決事項等の決定状況について、それぞれ報告しました。

世界で最も古い開発協力基金

「昭憲皇太后基金」

～ 13カ国に約3600万円を配分 ～

昭憲皇太后

設立105年の歴史ある基金
配分金は累計約15億円

赤十字国際委員会、国際赤十字・赤新月社連盟で構成される昭憲皇太后基金合同管理委員会は、今年度の昭憲皇太后基金の配分先を決定。13カ国の赤十字・赤新月社に、総額約3600万円が配分されます。

同基金が創設されたのは1912（明治45）年。これまでの配分金は世界163カ国、累計額約15億円に上ります。

世界でも高く評価されている昭憲皇太后基金

昭憲皇太后基金は、ワシントンで第９回赤十字国際会議が開催された際、明治天皇の皇后であった昭憲皇太后が、赤十字の平時事業を奨励する思し召しをもって国際赤十字に10万円（現在の３億５千万円相当）を寄付されたことを機に創設されました。

支援の対象となる事業は災害対策、保健衛生、血液事業、青少年赤十字活動など、開発途上国における赤十字の平時事業です。また、同基金は皇室をはじめとする日本からの寄付金によって成り立っており、元金を使用せず利息のみを充当。希望赤十字社の申請を査定して配分先を決定し、毎年、昭憲皇太后のご命日にあたる４月11日に配分しています。

世界中の災害・感染症などに苦しむ人々の救済や福祉の増進、防災、病気の予防など、時代を先取りした率先的な人道支援は世界で高く評価され、深い敬意と謝意が寄せられています。

今年度の配分先と対象事業

1. スワジランド赤十字社（アフリカ）
約 303 万円
1000世帯を対象とした手洗い研修や、干ばつの影響を受ける地域に対して水・衛生環境の改善

2. チャド赤十字社（アフリカ）
約 216 万円
特に女性に対して、基礎保健や衛生といった知識や技術を伝達し育成する「母親のクラブ」の促進

3. ギニア赤十字社（アフリカ）
約 331 万円
エボラ出血熱へ対応した経験から、将来の感染者をなくすため地域の衛生環境を改善

4. トーゴ赤十字社（アフリカ）
約 309 万円
ユースボランティアを中心に、健康を促進し無償献血者を増やすための活動

5. アンティグア・バーブーダ赤十字社（南アメリカ）
約 262 万円
活動基盤を強化するため、地域との連携を強化し、活発で専門性の高いボランティアを増やす活動

6. アルゼンチン赤十字社（南アメリカ）
約 313 万円
同赤十字社の各支部で救急法を数多く展開するため、規模を拡大し普及活動を促進

7. ニカラグア赤十字社（南アメリカ）
約 246 万円
高齢者が社会で孤独にならないよう、ボランティアとともに健康を促進し地域との連携を深める活動

8. フィリピン赤十字社（アジア大洋州）
約 228 万円
特に学校の先生を対象とした防災教育を普及し、訓練などを通して災害対応能力を強化

9. カンボジア赤十字社（アジア大洋州）
約 277 万円
若年層を対象に、交通安全運動を促進し、交通事故をなくす活動

10. ジョージア赤十字社（ヨーロッパ）
約 311 万円
紛争の影響を受けた若年層に対し、社会活動を通じて活発的な市民として活動することを促進

11. キルギス赤新月社（ヨーロッパ）
約 224 万円
歩行者と運転手の交通安全を促進し、交通事故の件数を減少

12. クロアチア赤十字社（ヨーロッパ）
約 249 万円
社会的弱者など支援が必要な方へ医療を提供

13. レバノン赤十字社（中東・北アフリカ）
約 300 万円
差別や暴力のない社会を形成するため、人道的価値と赤十字の原則を普及

「健康豆知識」は切り取って保存していただけます

日赤のドクター＆ナースが教える
知ってて良かった！
健康豆知識

file. 35

「がん」って何？

高槻赤十字病院　がん看護専門看護師　原武麻里
大阪府高槻市阿武野 1-1-1 TEL 072-696-0571（代）

日本で最も多い死因が「がん」であることは、多くの方がご存じかと思います。そもそもがんとは、どのような病なのでしょうか。

がんは、遺伝子に傷ができ性質の変わった細胞が何度も分裂し塊になったものです。たった１ミリのがんが作られるのに必要な細胞は、なんと約100万個。小児がんや若年層のがんなど、がん細胞の増殖スピードが速いものもありますが、通常がんが作られるには長い年月を要します。また、初期症状が出にくい特徴もあります。最も進行した段階のステージ４でも全く症状が出ないこともあるほど、“気付くのが難しい病”なのです。

がんの発生原因には、たばこや食生活の乱れ（過度の飲酒と塩分摂取）など生活習慣や過度のストレス、ウイルス・細菌の感染などが考えられています。たばこの煙に含まれている発がん性物質は、喫煙することで血流に乗り全身に運ばれるため、さまざまな部位でがんの発生リスクが高まります。たばこを吸わない人も副流煙を吸うこと（受動喫煙）で、リスクを負います。また、アルコールや塩分を過剰に摂取すると、発がん性物質の影響を受けやすくなってしまいます。がんのリスクは身近なところにあるのです。しかしながら、いくつかの偶然が重なって発生することもありますので、一概には生活習慣が原因とはいえません。

「日本人の２人に１人ががんになる」といわれる現代ですが、実際に罹患（りかん）すると「まさか自分が」とショックを受ける方は少なくありません。けれども、ショックを乗り越え、自分でがんについて調べたり、医師や看護師に質問を投げかけたりするなど、少しずつがんと向き合うようになる患者さんを何度も見てきました。

がんは発生から症状が出るまでに時間がかかる病。「自分は大丈夫」と決して安心せず、定期的な健康診断やがん検診を受けることが、早期発見につながります。

先述の通り、がんは気付くのに“時間のかかる病気”です。「自覚症状がないから自分は大丈夫」と安心せず、普段から食事などの生活に気を付け、定期的にがん検診を受けることが大切です。そして、がん＝死ではありません。たとえ罹患しても、早期発見で生存率が高まる可能性もあります。病院ではサポート体制を整えていますので、決して一人で悩みを抱え込まず、まずは病院で相談するようにしましょう。

WORLD NEWS

ネパール地震 復興支援事業

被災した14郡のうちで最も被害の大きかったシンドパルチョーク郡にあるタンパルダップ村

発災から２年。住宅再建がいよいよ本格化！ ネパール赤十字社と連携した包括的な取り組み

「世界の屋根」と呼ばれるヒマラヤを配し、世界中から観光客が訪れるネパール。2015年4月25日に起きたマグニチュード7.8の大地震では、死者8856人、全半壊した家屋は約89万戸と、同国の人口の5分の1に相当する560万もの人々が影響を受けました。現在もネパール赤十字社（以下、ネパール赤）が、各国赤十字社や国際赤十字・赤新月社連盟と協力しながら復興支援活動を続けています。日本赤十字社もまた、皆さまから寄せられた約20億円の救援金を元に、最も被害の大きかったシンドパルチョーク郡で震災直後から活動を継続しています。

ボランティアによる被災の実態調査

シンドパルチョーク郡のタンパルダップ村は、震災直後に日赤の医療チームが緊急支援に入ったメラムチ村から、川を３つ渡った山間部にあります。村からほんの15キロの距離ですが、乾期でも道が悪く、ジープでも1時間半を要します。雨期には車で行くことが難しく、ぬかるんだ道を数時間歩くこともあるような奥地にあります。

日赤はこのタンパルダップを含む周辺８村で、被災者が生活を立て直すことをサポートするために、ネパール赤とともに復興支援事業を進めています。そのための一歩として、昨年34人の赤十字ボランティアの協力を得て被災の実態を調査しました。

シンドパルチョーク郡は貧困のために出稼ぎ者が多く、復興活動に関われる若い世代が少ないといわれますが、ボランティアの平均年齢は

再建した診療所の引き渡し式で、ネパール赤十字社と地域の人々

「とっさのとき、どうする？」は切り取って保存していただけます

file. 1

とっさのとき、どうする？

山歩きをしていたら、友人が転んでしまった！ 足首を押さえて痛がっているけれど……

ケガ編① 骨折と捻挫

山道を歩いていて転倒や滑落をし、足を痛めたのであれば、捻挫や骨折が疑われます。足に変形や変色があれば、骨折している可能性が高いです。

骨折か捻挫かは不明でも、激しい痛みを感じている場合、無理に歩かせるとけがが悪化するので、なるべく歩かせず、救助を要請することをお勧めします。

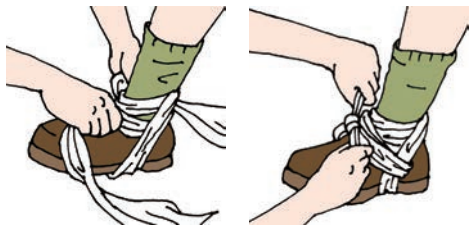
もし、救助の要請ができず、どうしても自力で下山しなければならない状況であったり、誰かの補助があれば下山できそうな場合、捻挫であれば、イラストのような応急処置を行います。薬局で市販されている三角巾があればベストですが、なければ大判のスカーフなどでもよいでしょう。

足の骨折の場合、わずかな振動にも激痛を感じ、一人では立ち上がることができない状態になります。まずは痛めた箇所を動かないように固定することで痛みを和らげることができ、けがの悪化を防ぐことができます。

山の中であれば、まっすぐな太めの枝を見つけて患部に添え木をし、布などで縛り固定します。キャンプ用に新聞の束を持っていれば、折り重ねて硬くし、添え木やギプスのように使うことができます。

足を骨折して歩くことはまず不可能なので、誰かが背負うなどして慎重に下山しましょう。

もし友人が崖下に落ちたのであれば、手を貸すために下りるとき、自分自身の安全が確保できるように気をつけてください。



1. 靴を履いたまま、布の中央を土踏まずに当てる。
2. 足首の後ろで交差させ、前に回す。
3. 前で交差させ、両端を土踏まずから足首の後ろへいく布に、それぞれ内側から通す。
4. 足首を曲げた状態で動かないように締め、前で結ぶ。

20代前半。赤十字で活動するのは全員初めてでしたが、調査の方法についても理解が早く、頼もしいものでした。

一つの村の中でも集落間の移動には徒歩で数時間かかりますが、ボランティアは精力的に一週間で260世帯を訪ねました。こうして集積したデータや他の調査結果に基づき、日赤はネパール赤と復興支援事業計画を策定。2016年11月、復興支援事業にかかる協定書を取り交わしました。

一つの分野ではなく「包括的な」取り組みで

昨年は日赤の支援で、シンドパルチョーク郡のラガルチェ村の診療所が再建されました。

診療所のヘルスワーカー（医師に代わって一次医療を提供する保健師）であるルパさんは、「以前は、ラガルチェ村の多くの母親は家で出産していましたが、今では月に平均2、3人の赤ちゃんが（日赤が再建した）ラガルチェ診療所で生まれています」と言います。

「診療所では本当に良いサービスを受けられて、とても感謝しています」と語るのは、9人家族の母親であるヤギャさん。稲穂の束を運んでいた息子が転倒し、頭を石に強打。11針を縫うほどの大きな傷を負いましたが、診療所で治療を受けることができました。

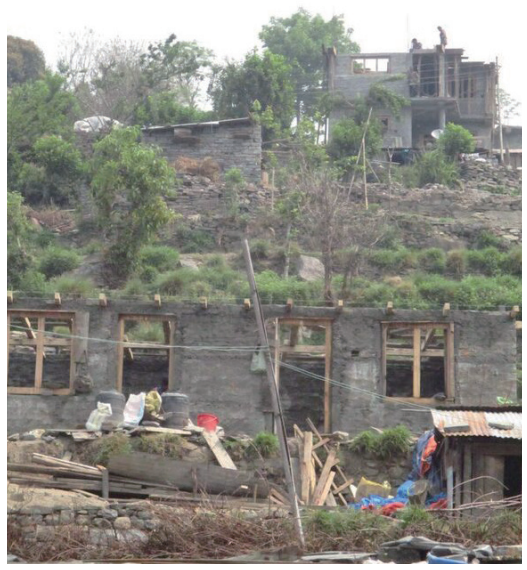
ネパール赤は、復興支援の内容を「包括的な取り組み」とするように定めています。具体的には、住宅の再建、生計の支援、水施設や衛生環境の復旧、保健分野の復旧に焦点を当て、被災者が多岐にわたる分野の支援を受けられるように活動しています。

再建された診療所で最初に産声を上げたシャムラチャナちゃんと母親のプジャさん　©IFRC

復興支援事業のうち、生活の基盤となる住宅再建はとても大切な支援で、日赤は同郡のタンパルダップ村ともう一つの村で、約1500世帯を対象に住宅再建に必要な資金を支給しています。

また、こうした活動の担い手であるネパール赤が、組織力をつけ、より質の高い支援を迅速に提供できるよう、そしてネパール国民が赤十字に求める人道的な使命をしっかりと果たせるように、長期的な視野に立った組織強化も、日赤の活動の柱の一つです。

今年4月で発災から2年経ち、復興への取り組みの基盤が整いつつあります。政治や文化的背景、雨期、祝祭日など、さまざまな要因で活動が止まることもありますが、これからもネパール赤と協力しながら活動を続けていきます。


日赤の資金を活用し住宅の再建が進められている

日赤現地職員によるシンドパルチョーク郡での聞き取り調査の様子

住民や行政職員を対象にした復興支援活動説明会

VOL. 10 人道支援の現場から

ボーダー（国境）のその先に見えたものは……

辻田 岳
Gaku Tsujita
国際赤十字・赤新月社連盟
ジュネーブ事務局（スイス）

赤十字発祥の地であるジュネーブは、国際赤十字をはじめ、多くの国際機関が集まるスイス第二の都市です。

私の役割は、日本の人々などから赤十字に寄せられた支援を、アフリカや中東など各地の活動につなげることです。善意を形にする大切な仕事ですが、その一方で、支援が十分に集まらなかったり、活動が政変で滞ったりと、さまざまな課題に直面して、その対応に追われる毎日です。ある国の活動では「数分後に」と約束した報告書が、3週間たってようやく届くことも。

初の海外勤務に加えて、価値観や時間感覚の異なる世界中の人たちとの交渉に少々疲れ気味の私を、同僚がドライブに連れ出してくれました。市内から10分も走るとフランスとの国境にたどりつきます。国境といっても、そこには無人の粗末な小屋があるだけで、人も車も何事もなく通り過ぎていきます。その先には……、スイスと変わらぬ春の日差しと、人々の営みがありました。

そうか、日本で生まれ育った私にとっての「外国」は海の彼方の遠い異国でしたが、ここでは隣町のような存在なのです。確かに、国や地域によって異なる点はたくさんあります。しかし、そうした違いを意識するのではなく、「苦しんでいる人を救いたい」という共通の思いに立ち返れば、その先に進めるはず。

そう信じて、今日も世界各地の赤十字の仲間たちと協力して、課題・難題に取り組みます。

平成29年5月1日（毎月1日発行） 第924号（昭和24年9月30日 第三種郵便物認可）

NOTICE FROM JRCS

日赤140周年。歴史のあらたな一歩を、共に歩み出しましょう。

あなたの手を、誰かを救う手に

赤十字が行っている９つの事業

日本赤十字社では「苦しんでいる人を救いたい」という思いを９つのかたちにして事業を展開しています。

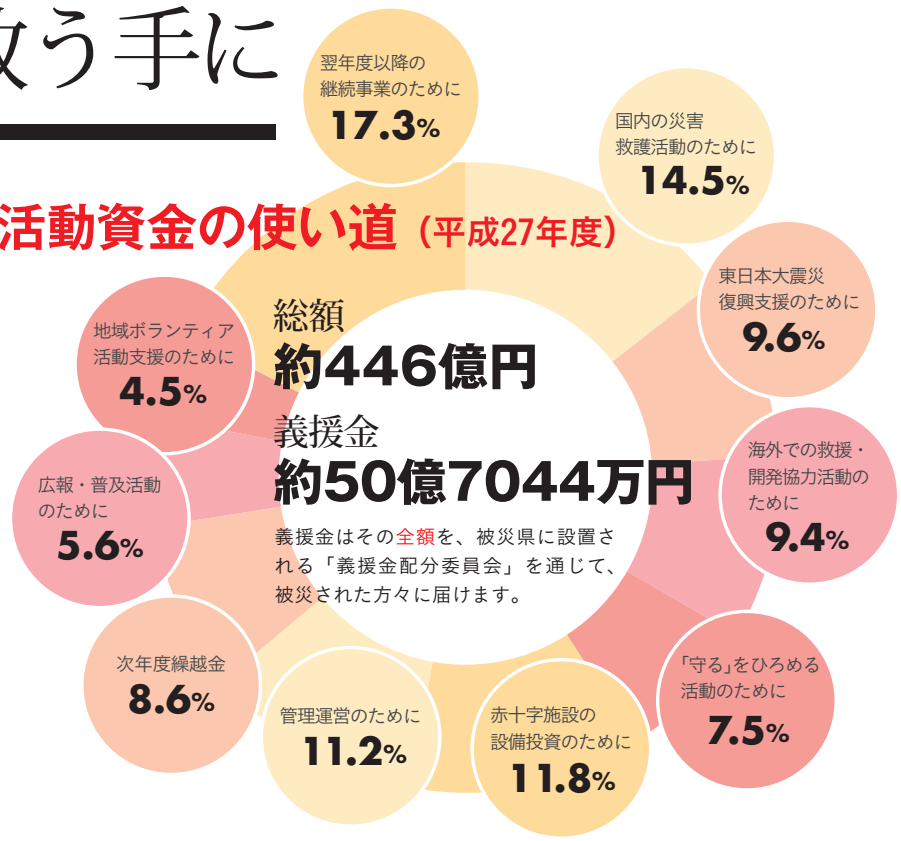
いのちを救う
- 国内災害救護*
- 国際活動*
- 医療事業
- 血液事業
- 救急法等の講習*

せいかつを支える
- 社会福祉
- 赤十字ボランティア*

ひとを育む
- 青少年赤十字*
- 看護師等の教育

９つの事業の中で「*」のつく事業などは、皆さまからのご支援ならびにご寄付で支えられています。ご寄付は活動資金として、右図の通り活用されています。

活動資金の使い道（平成27年度）



「寄付」という方法でも、赤十字の人道支援活動に参加することができます

ご寄付は支援活動・救援活動に必要な物資の準備に使われ、寄付をしてくださった方の代わりに日赤の職員が「いのちを救う」「せいかつを支える」「ひとを育む」活動を行います。

活動資金のご協力方法

主に以下の３種類で寄付を受け付けています。

インターネットで　口座振替で　お近くの赤十字窓口※で

【寄付された場合の税制上の優遇措置のご案内】
日本赤十字社にご寄付頂いた活動資金は、その内容や期間によって個人の所得税や企業等の法人税での優遇措置が受けられます。

あなたの寄付でできること（例）

大きな災害に備え、救援物資のさらなる充実を！

日本赤十字社は災害発生後、救援物資をすぐ被災地に届けられるよう、日頃からたくさんの毛布や安眠セット、救急セットを備蓄しています。

安眠セット（１人分）
￥2000

緊急セット（１世帯４人分）
￥3000

災害時用毛布（１枚）
￥1300

ご支援（ご寄付）方法については日赤のウェブサイトでご案内しています。ぜひご覧ください。

日本赤十字社　ご寄付　検索　www.jrc.or.jp

※詳しい情報は各都道府県の日赤支部、市区役所、町村役場の窓口でもご案内しております。

プレゼント PRESENT

日本赤十字社の公式マスコットキャラクター「ハートラちゃん」のぬいぐるみ（大１・小２）のいずれかを３名様にプレゼントいたします。以下の項目を明記のうえ、郵送・FAX・メールでご応募ください。

①お名前（匿名をご希望の方は、その旨もご記入ください）
②郵便番号・ご住所　③電話番号　④年齢
⑤赤十字 NEWS ５月号を手にされた場所（例／献血ルーム）
⑥５月号で良かった記事、興味深かった記事はどれですか？（いくつでも）
A. 表紙　B. 140年を振り返る：国内編　C. あの日々を忘れない
D. 赤十字を振り返る：国際編　E. トリビアトピック集　F. TOPICS「赤十字運動月間」
G. エリアニュース　H. 常任理事開催報告　I. 昭憲皇太后基金　J. 健康豆知識
K. ワールドニュース　L. とっさのとき、どうする？　M. 人道支援の現場から
N. あなたの手を、誰かを救う手に　O. プレゼント　P. Voice
⑦赤十字NEWSのご感想、扱ってほしいテーマ、その他Voice（読者の声）への投稿もお待ちしています。

応募先
郵送／〒105-8521
東京都港区芝大門1-1-3 日本赤十字社 広報室 赤十字 NEWS ５月号プレゼント係
FAX ／ 03-6679-0785 メール／ koho@jrc.or.jp（件名「赤十字 NEWS ５月号プレゼント係」）
応募締切
５月29日（月）必着 ※当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます

ヴォイス VOICE

赤十字NEWSにお寄せいただきました読者の皆さまの声をお届けします。

紙面で赤十字デーのレッドライトアップのことを知りました。実は私の誕生日は５月８日で赤十字デー。このプロジェクトがもっと広まりますように！（天野さん・神奈川県）

病院で初めてこの新聞を手に取りました。赤十字はちょっと近寄りがたいイメージでしたが、新聞を読んで、若者にも関心が深い人たちがいて、熱意を持って人のためにと行動していることを知り、心を打たれました。（三浦さん・福岡県）

今年の 3.11 に献血しました。月日が経った今こそ節目には原点に立ち返り、誰かの無理強いではなく自分の意思で助け合いの心が芽生えるように、震災の記憶を伝えていきたいと思います。（Ｋさん・愛知県）